

はじめに

オスティア・アンティカ遺跡日本調査隊¹は、2017～2020 年度科研費 B「先端光学機器によるオスティア・アンティカ遺跡・遺物の文字情報調査」(代表：豊田浩志 上智大学名誉教授)の助成のもと、古代ローマ時代における庶民の生活実態に迫るべく、2018 年度も現地調査を行った²。その中でもグラフィッティを担当とする筆者は、8 月 27 日から 9 月 12 日にかけて調査を行い、本稿はその成果報告である³。昨年度と同様すでに知られているグラフィッティの確認を行い、オスティア・グラフィッティの現状と実態把握に努めた⁴。そしてその過程で得られた知見を提示したい。

1 オスティア・グラフィッティ確認調査

本年度調査は、グラフィッティの確認されている 61 遺構中以下の 6 の遺構(3 遺構は昨年度の再調査)で行い、161 点中 118 点のグラフィッティを再確認できた。グラフィッティの番号(G・・・)は、便宜上、データベースである Ostia - Harbour City of Ancient Rome(<http://www.ostia-antica.org/>)のものを援用している⁵。各遺構の部屋についても、このデータベースのそれぞれの項を参照されたい。なお、写真は特に断りがない限り筆者による撮影である。

(1) Caseggiato di Diana(I, III, 3-4)

この遺構(非公開)では、グラフィッティ 4 点中 3 点(G0015、G0016、G0018)を確認し、その際、G0018 について新たな知見が得られた。

G0018 は、データベースによると、クレーンと解釈されたピラミッド型の図像に文字(IRIIN)が添えられている併存グラフィッティである。しかしながら、文字は実見すると、黒い線で書かれ、図像のように搔かれたものではない(図 1)。文字を現代のものとは断言できないが、少なくとも図像と文字は関連付けるべきではない。実見の重要性を示す好例といえよう。

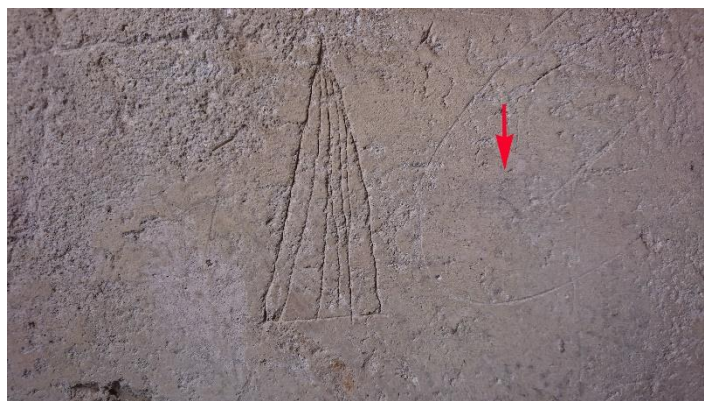


図 1 G0018 (中央部に図像、矢印下に文字)

(2) Domus di Giove e Ganimede (I, IV, 2)

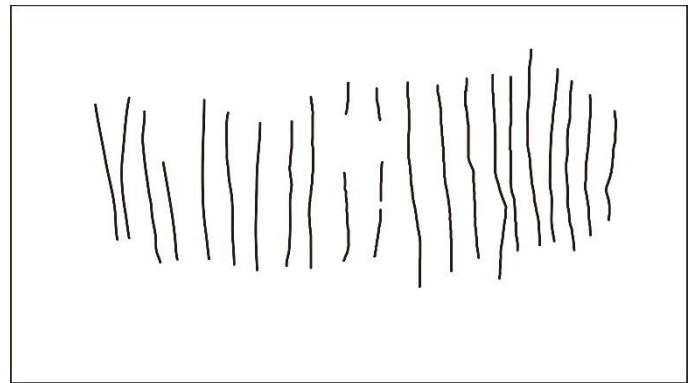
この遺構(非公開)では、再調査の結果、新たに G0029・G0032 を確認し、昨年度の調査と併せてグラフィッティ 26 点中 22 点⁶を把握できるようになった。また、これまで所属が「Unknown」となっていた G0484～G0487 をこの遺構のグラフィッティとして再確認もできた。データベースでは、写真の提示に限られているので、ここで詳細を提示しておきたい(図 8～図 10 も参照)。

・ G0484

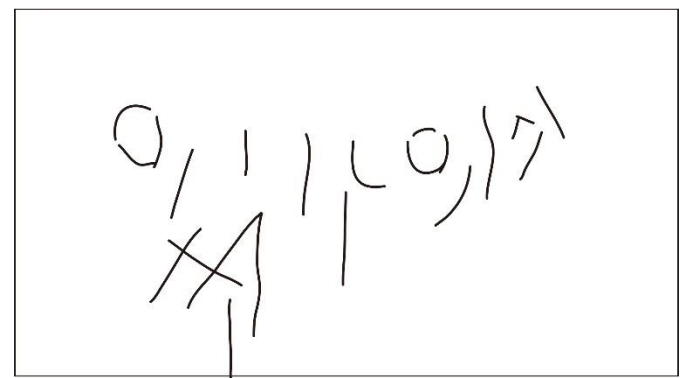
G0484 と名付けられた写真に 3 つのグラフィッティが含まれている。3 つのグラフィッティは左右に並んでおり、左から①とする。ちなみにこの写真は上下逆になっており、それがこれまで再確認されてこなかった一因と考えられる。

①数字 (Room 33 東壁、10×23cm)

IIIIIIIIIIIIIIIIII (21)



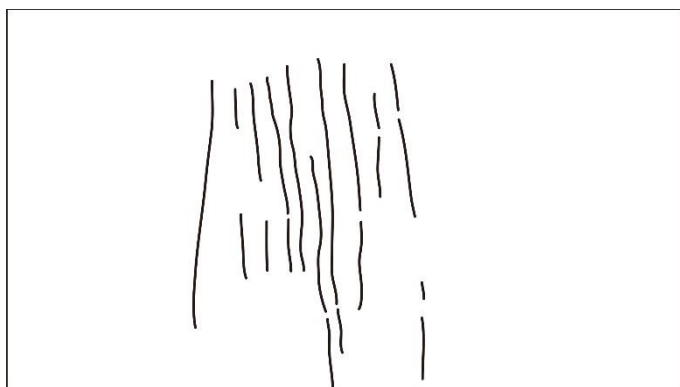
②不明なテキスト (Room 33 東壁、1×7cm(1 行目)、1×3cm(2 行目))



いくつかの文字の痕跡が認められ、現状では左上の冒頭が O、中央部あたりが COS と判読できなくもない。

③数字 (Room 33 東壁、7.5×8cm)

IIIIIIIIII (10)

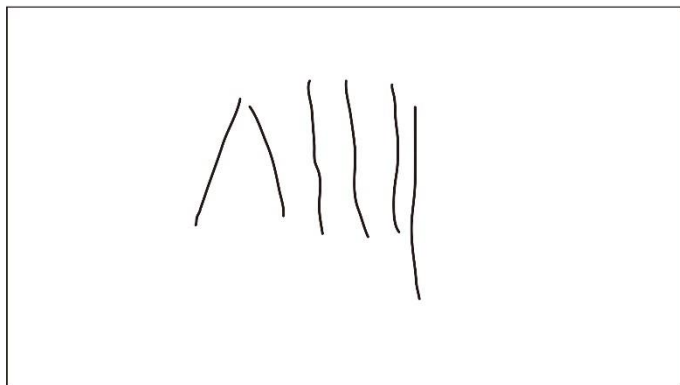


・ G0485～G0486

2つの番号が付けられた写真に3つのグラフィッティが含まれている。3つのグラフィッティは上下に並んでおり、上から①とする。

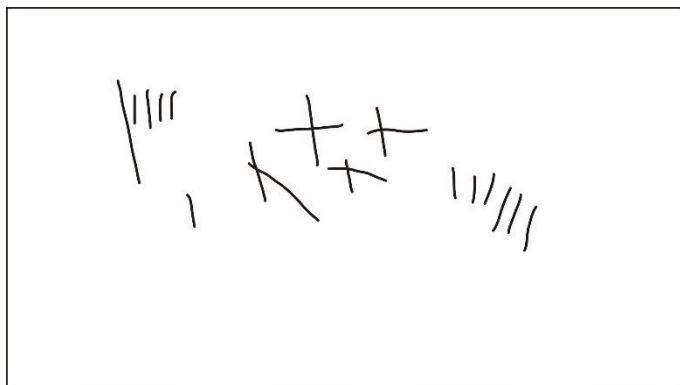
①数字 (Room 33 南壁、3×5.5cm)

IIIIII (6)



上方で狭まっている冒頭の2線はAではなく、数字であろう。縦線が斜めになることは決して珍しくはない。

②不明なテキスト (Room 33 南壁、5×10cm)

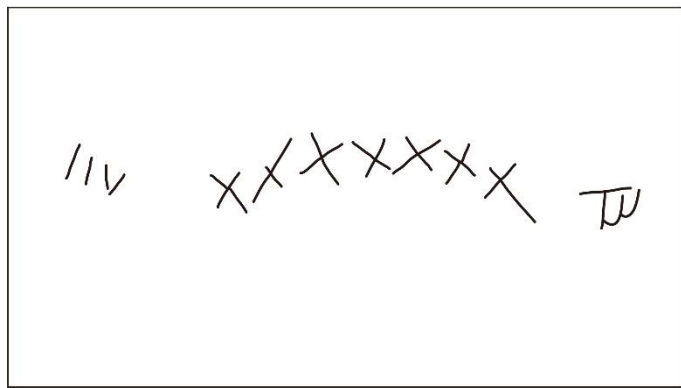


縦線と+記号がそれぞれまとまって記されている。データベースでは「Numbers」に分類されているが、縦線はまだしも、+記号の意味や両者の関係は不明である。

③数字? (Room 33 南壁、1.5×11.5cm)

IIII (4)

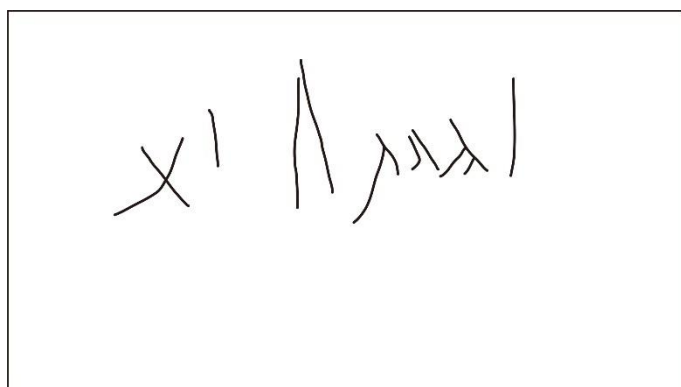
XXXXXXX (70)



縦線と×記号がそれぞれまとまって記されている。ともに数字(I=4、X=10)として理解できるだろう。両者はいくらか離れているので、別々なグラフィットとして見なすべきである。×記号のさらに右方にもグラフィットらしきものがあるが、現時点では全く見当もついていない。

・ G0487 日付？ (Room 33 南壁、1.5×8cm)

XIII MAR(tias)？



六文字程度で構成されているグラフィットである。比較的明瞭な一文字目はX、最後から二、三文字目はMAと同定できる。冒頭がXでありギリシア語単語の可能性もあるが、周囲に「数字」が多ことを踏まえて、現状ではラテン語の「日付」として理解している。

(3) Domus del Tempio Rotondo (I, IX, 2)

この遺構では、再調査の結果、新たに G0058 を確認し、昨年度の調査と併せてグラフィッティのすべて(4 点中 4 点)⁷を把握できるようになった。

(4) Sacello delle Tre Navate(III, II, 12)

この遺構(非公開)では、グラフィッティ 12 点中 11 点⁸を確認した。G0152 のみ確認できなかったが、それはすでに 2008 年の時点でほとんどが、2015 年の時点では完全に失われたと報告されている通りである⁹。

なお、G0155 については、従来の判読(ΦΟΡΑ)の前にもう一文字あることを確認できた(図 2)。縦線からI、あるいはΦとの隙間に鑑みてΓや C(Σ)と同定できる。このグラフィットは「不明なテキスト(Unclassified texts)」に分類されているが、Θεισιφοραのような名前の末尾であるだろう。実際、同じ壁ですぐ近くにギリシア文字で名前が記されている(G0153 : Ἀβασκαντι[α]νος、G0154 : Διοδωρος)。

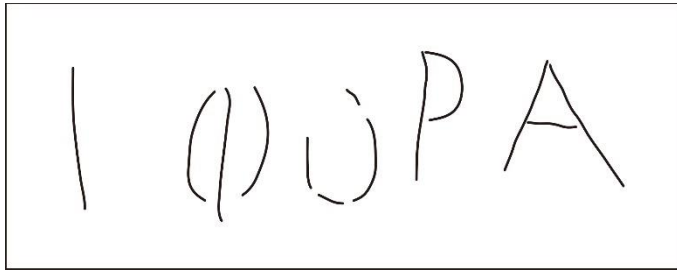


図2 G0155 トレース図

(5) Casa a Giardino(III, IX, 4)

この遺構では、再調査の結果、G0197・G0198 を新たに確認し、昨年度の調査と併せてグラフィッティ 23 点中 16 点¹⁰を把握できるようになった。

(6) Casseggiato degli Aurighi(III, X, 1)

オスティア最大のグラフィッティ点数(93 点)¹¹を誇るこの遺構では、グラフィッティが集中している Room17, Room26～32(それぞれ非公開)を中心に調査を行った。その結果、Room17 で 40 点中 23 点¹²、Room28 で 18 点中 14 点¹³、Room29 で 2 点中 2 点¹⁴、Room30 で 16 点中 16 点¹⁵、Room32 で 7 点中 7 点¹⁶、その他で 10 点中 1 点¹⁷のグラフィッティを確認した(計 93 点中 63 点)。またこれまで所属が「Unknown」とされていた G0469(Room30)、G0470(Room24)がこの遺構のものであることも確認できた(従って遺構総計 95 点中 65 点となる)。Room17 では半数近くが確認できなかったが、とりわけ東壁で文字が密集し、現時点で個別のグラフィットに分離できないためでもある(図 3)。今後の継続的な調査、分析が求められる。

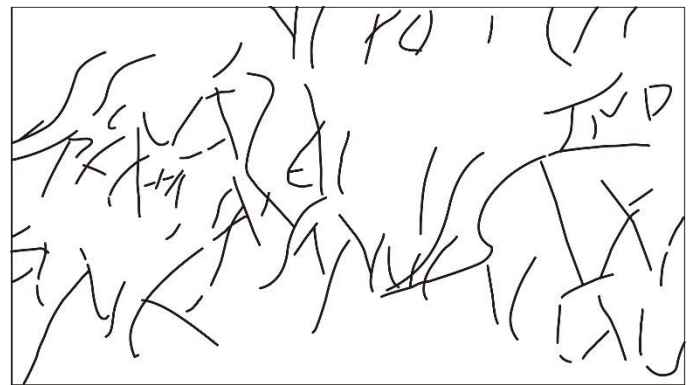


図3 Room 17 東壁の一部

2 新出グラフィッティの発見

確認調査に際し、3 つの遺構から新出グラフィッティ 17 点(文字グラフィッティ 10 点、図像グラフィッティ 7 点)を発見した。それらをここで提示しておきたい。提示は、文字翻刻、写真¹⁸、トレース図によって行う。各遺構の部屋の詳細は、先章の「オスティア・グラフィッティ確認調査」同様、データベースのそれぞれの項を参照されたい。グラフィット番号は、壁の左から順につけている。

グラフィッティか否か(単なる傷など)の区別について、筆者は、故意になされた点に置いている(連続する縦線のみ単純なグラフィットを例に出すと、少なくとも 3 本の線を確認できるなど)。無論この場合グラフィッティの新旧判断が不可欠であるものの、現状では体系的な基準はなく、個別に現場で判断した(全体構成、字形、線質など)。

(1) Domus di Giove e Ganimede (I, IV, 2)

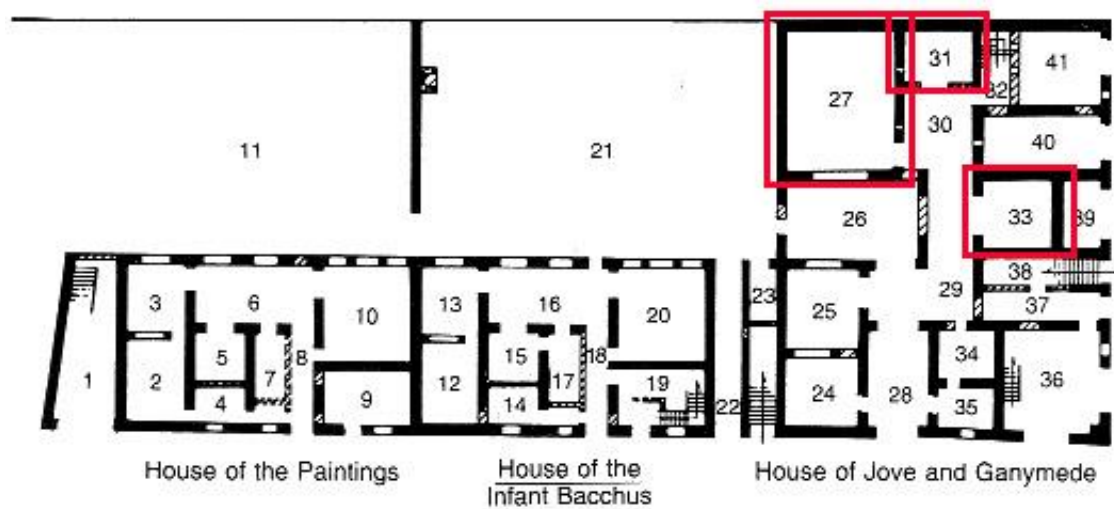
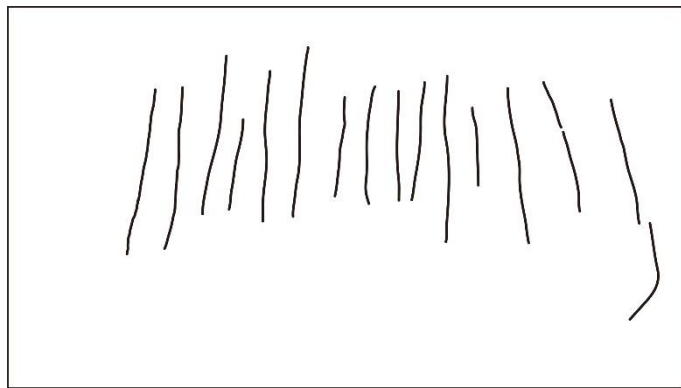


図4 Domus di Giove e Ganimede 平面図：左が北 (De Laine(1995), fig. 5, 4 から転載(一部改変))

・ Room27

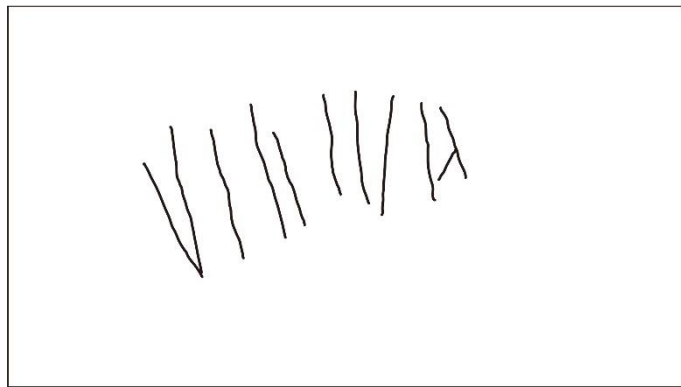
①数字 (北壁、3. 5×13cm)

IIIIIIIIIIIIII (15)



②数字 (北壁、2. 5×5. 5cm)

IIIIIIII? (10?)



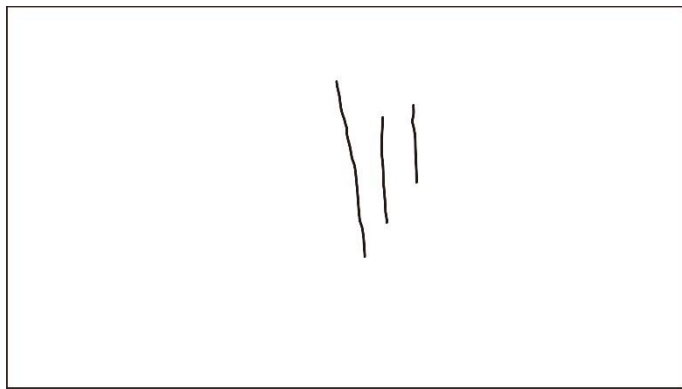
修復のために線の判別が難しくなっているが、10 本程度の線が確認できる。



図 5 Room 27 北壁左方部

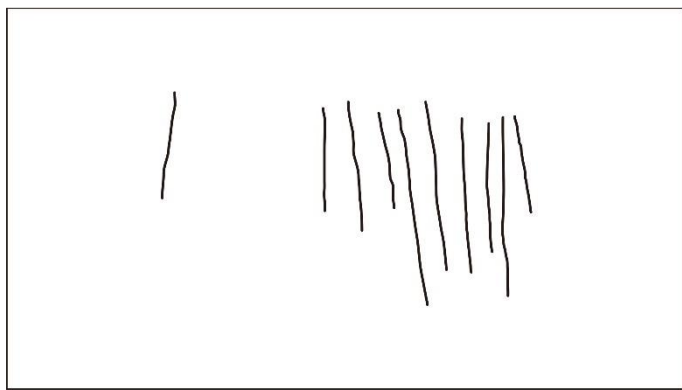
③数字 (南壁、3. 5×6cm)

III (3)



④数字 (南壁、3. 5×10. 5cm)

I IIIIIIII? (10?)

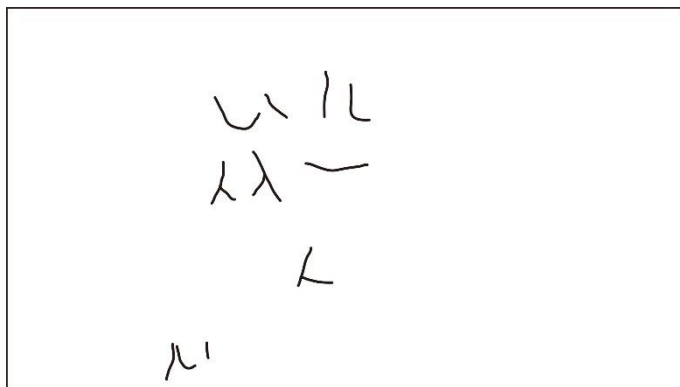


右部分が破損しているため正確な数は不明であるが、少なくとも 10 本の線を確認することができる。



図6 Room 27 南壁左方部

⑤不明なテキスト（南壁、7×5cm、文字の大きさ 1cm）



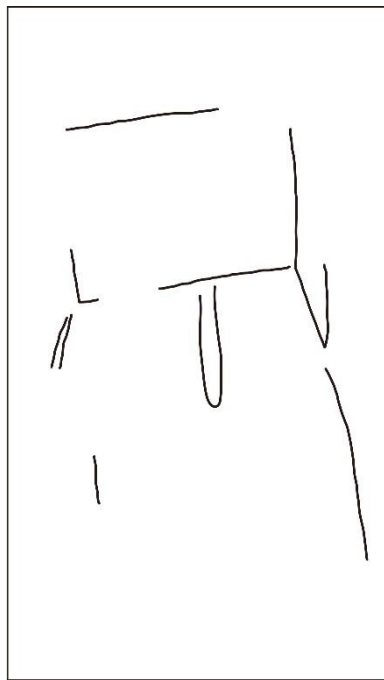
いくつかの文字らしきものが認められるが、比較的明瞭なのは右端の上下に3つ並んでいるM状のものに限られる。



図7 Room 27 南壁右方部

・ Room 31

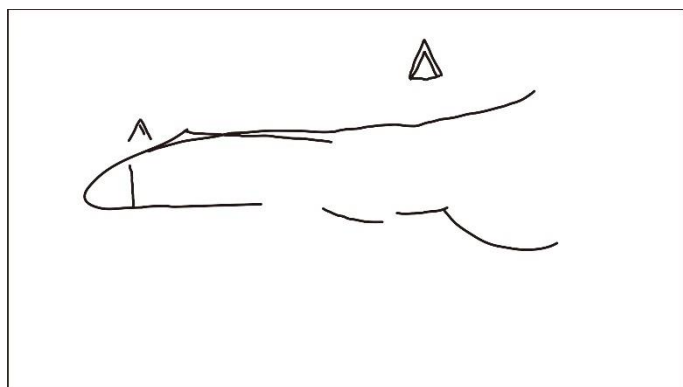
①人物像？（北壁）



輪郭は人物像の一部(胸から脚)を想定させる。中央部の垂れ下がりにはファルスかもしれない。文字グラフィッティではあるが Room 31 において「性的関係(Erotica)」(とりわけ同性愛関係)が多く(17 点中 5 点¹⁹)、その存在は不思議なものではない。

・ Room 33

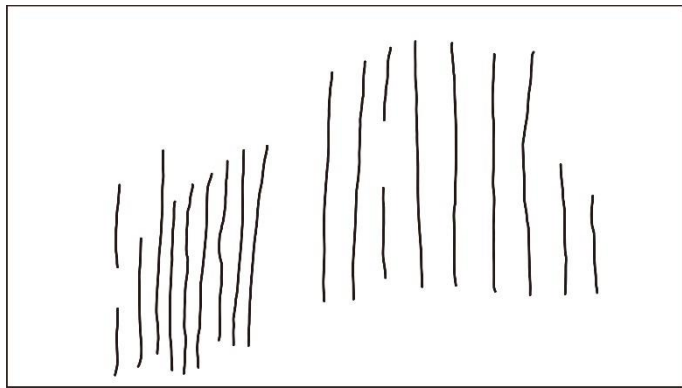
①性的なオブジェクト (北壁、4×27.5cm)



一見して、ファルスと想定可能な図像である。オスティア・グラフィッティの「性的関係」において図像は稀であるが(17 点中 2 点)、長い 2 本の横線の左端部分を曲線と縦線で区切って亀頭を、下の横線の右端部分を下に膨らますことで陰嚢を表現していよう²⁰。近くにある 2 つの三角形オブジェクト(左 1.5×2cm、右 2×2cm)の意味と関係は不明であるが、もしかすると女性器と理解できるかもしれない。

②数字 (東壁、12×23cm)

IIIIIIII IIIIIIII? (18?)



中央部分が破損しているため正確な数は不明であるが、少なくとも 18 本の線を確認することができる。



図 8 Room 33 東壁

③数字 (南壁、3×8cm)

IIIIIIII (8)

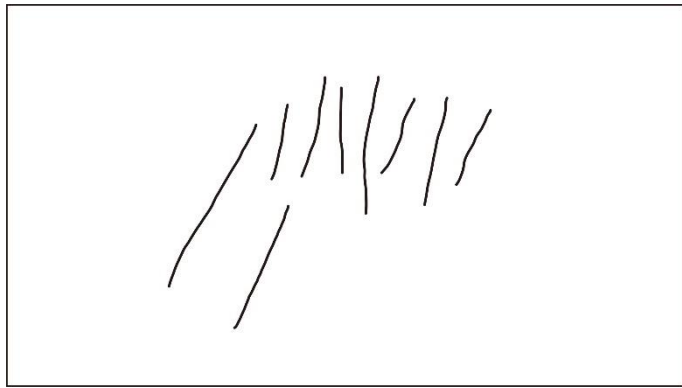
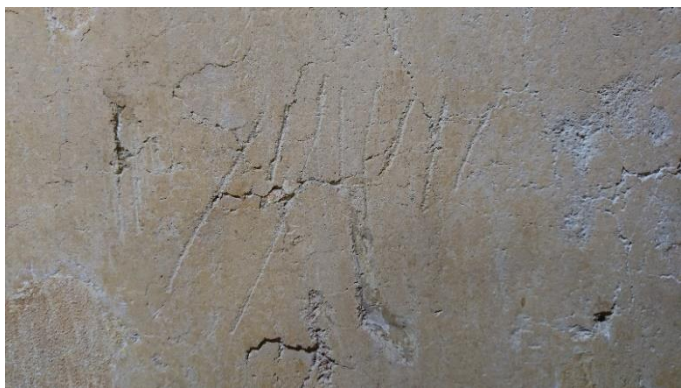
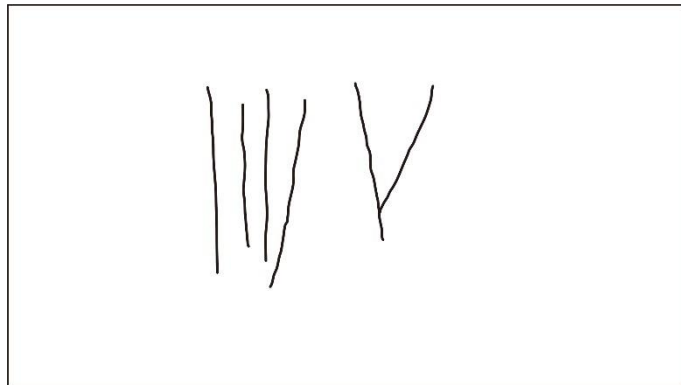
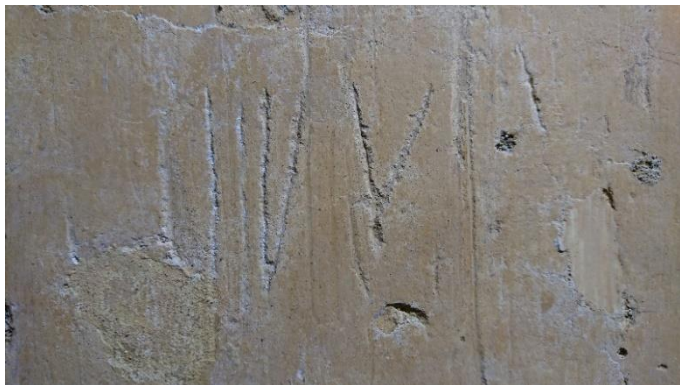


図 9 Room 33 南壁

④数字（西壁、1×2.5cm）

IIIIII? (6?)



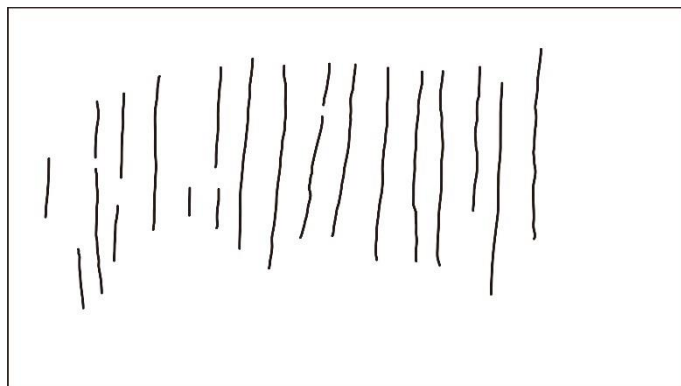
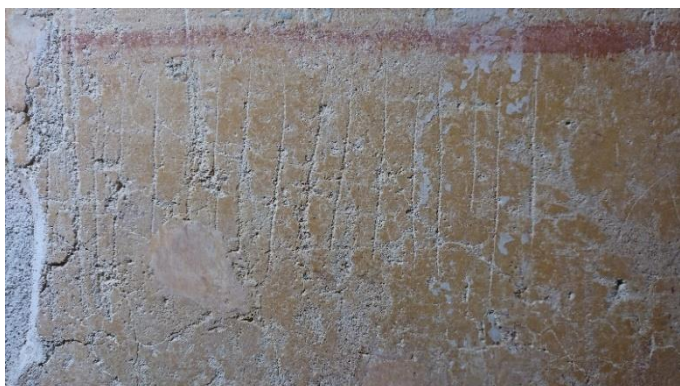
末尾は V ではなく、下方で狭まっている二つの縦線であろう。数詞(「数字」にせよ「日付」にせよ)の場合、通常 V の方が先に表記され、それはオスティア・グラフィッティでも例外ではない(例えば、同じ Domus di Giove e Ganimede の G0027・G0028)。末尾の 2 線と縦線の間には 3 本の縦線の痕跡が残っているので、本来の線数は 9 であるかもしれない。



図 10 Room 33 西壁

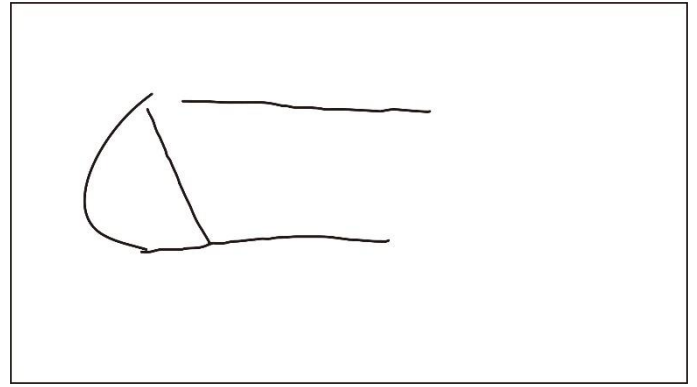
⑤数字（北壁、7.5×18.5cm）

IIIIIIIIIIIIIIIIII? (17?)



左部分が破損しているため正確な数は不明であるが、少なくとも 17 本の線を確認することができる。

⑥性的なオブジェクト (北壁、4×9. 5cm)



長い2本の横線が左端部分で曲線と縦線によって結び付けられている。Room 33①に比べて簡素であるが、形状は類似しているので、同様にファルスと理解できるだろう。

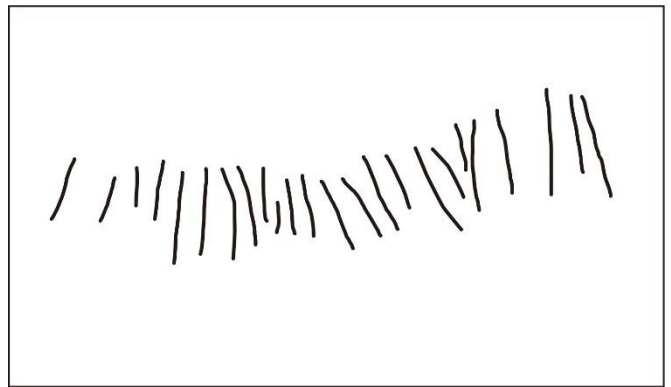
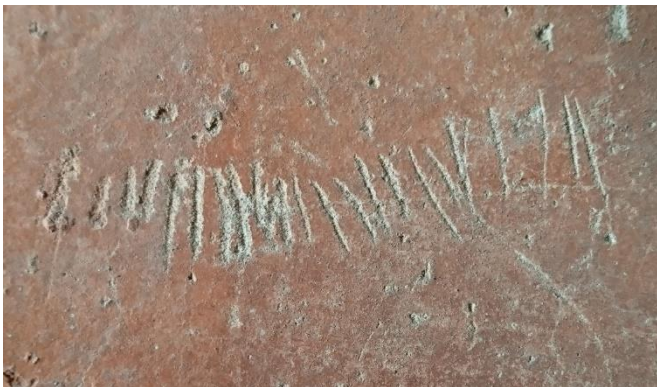


図 11 Room 33 北壁

(2) Sacello delle Tre Navate(III, II, 12)

①数字 (内陣左壁(G0515 と G0517 の間)²¹、約 1. 5×9. 4cm)

IIIIIIIIIIIIIIIIIIII(24)



(3) Terme dei Sette Sapienti (III,X,2), Room 5(=The room of the Seven Sages)²²

①植物モチーフ (西壁下段、22×10cm)

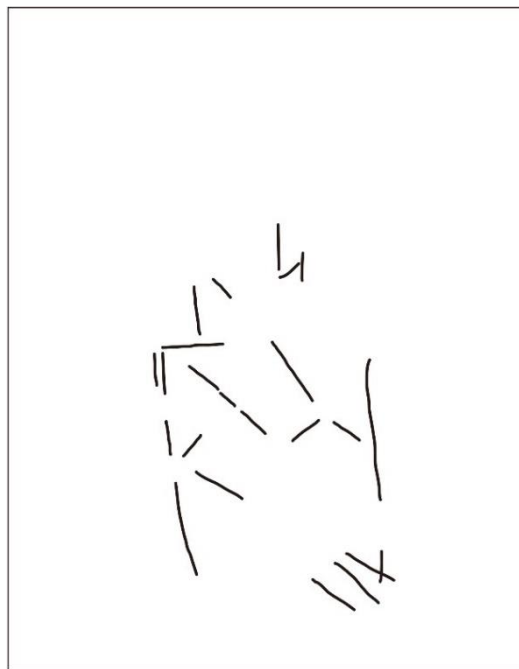


多くの枝葉と長い根を持つ樹木である。オスティア・グラフィッティでは稀なもので、類例にこそ G0437, G0451 があるものの(2点とも「海岸『浴場』」のものであることは興味深い)、丸い実らしいものがある点が特徴的である。浮き彫りではあるが、丸い実のある樹木はオスティア出土の墓碑にも表れ(図 12)、また、このグラフィットの右方には梯子らしきものも見られるので、何らかの寓意や場面を表現している可能性が高い。



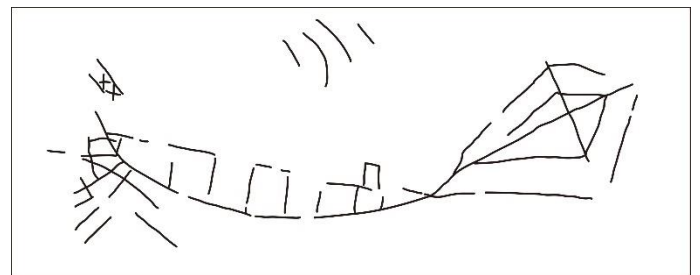
図 12 丸い実のある樹木(食堂入り口近くの墓碑側面)

②不明なオブジェクト (西壁下段)



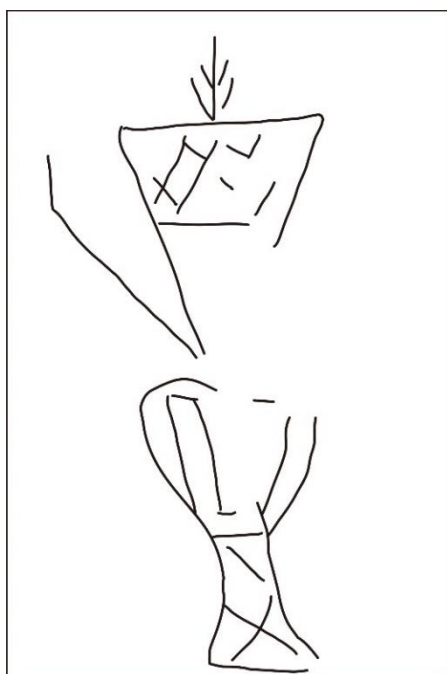
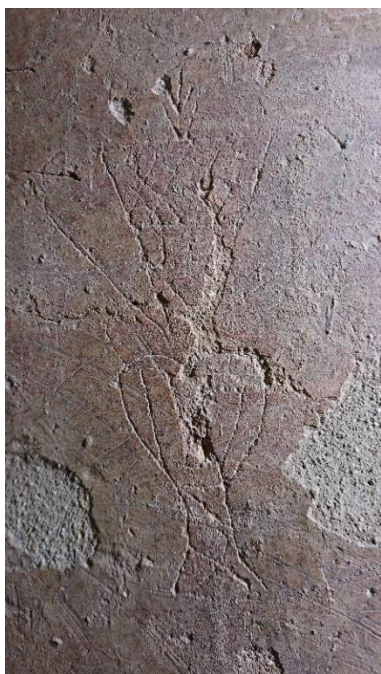
長方形の台座状の上に何らかの構造物が認められる塔的建造物である。残念ながら細部は不明であるものの、輪郭からは「Famous buildings」に分類されるポルトゥスの灯台(G0230、G0390、G0446、G0510)やトラヤヌス記念柱(G0228)、オスティア・グラフィッティでは知られていないが祭壇のようなものを想定できよう。

③船 (西壁下段)



平たい船体を持つ船である。船首は×印で飾られ、櫂を持ち、中央部上方には部分的であるが帆も認められる。船図像(Ships)自体はオスティア・グラフィッティで珍しくないが(37点)、他では見出されない船尾にあるものが問題である。錨泊を表現するアンカーや付属の小ボートであろうか²³。

④不明なオブジェクト (西壁下段)



明瞭な線刻とは裏腹にその同定が不明なグラフィットである。図像グラフィッティを網羅している Langner(2001)にも類例はないが、頂部から突き出ている枝(ナツメヤシか?)に注目すれば、それを容れる器や、それが付属する祭壇かもしれない。



図 13 西壁下段

3 現地調査に基づく指摘

(1) Sacello delle Tre Navate(III, II, 12)

この遺構のグラフィッティは、新たに発見した1点を加えて13点で、内陣右壁に8点(G0152, G0153, G0154, 0155, 0156, G0394, G0494, G0519)、左壁に5点(0515, 0516, 0517, G0518, (2)①)を数える。内容こそほとんどが「名前」程度に過ぎないものの²⁴、ラテン語グラフィッティ(左壁)とギリシア語グラフィッティ(右壁)の住み分けが興味深い。しかもラテン語グラフィッティがなされた壁(赤漆喰)は、壁に空いた穴(73×24cm)の中にあり、改築時に石積み壁に埋め込まれていた²⁵(図 16)。となれば、ラテン語グラフィッティとギリシア語グラフィッティには年代差があり、後者の方が新しいものと考えられよう。無論、それが両壁の並存、両グラフィッティの同時性を否定することにはならないし、そもそも2つの壁の、13点のグラフィッティが Sacello delle Tre Navate の実情をどこまで反映しているのかも問題である。ただ、グラフィッティが最終段階のものに残りやすいこと、隣接する Casseggiato degli Aurighi(III, X, 1)をはじめ Regio III の近隣遺構でギリシア語グラフィッ

ティが極めて多いこと(全 38 点²⁶中 29 点)を踏まえれば、この地区ではギリシア語を用いる人々がオステリアでもとくに活発に往来するようになった、少なくとも往来していたのは間違いない²⁷。

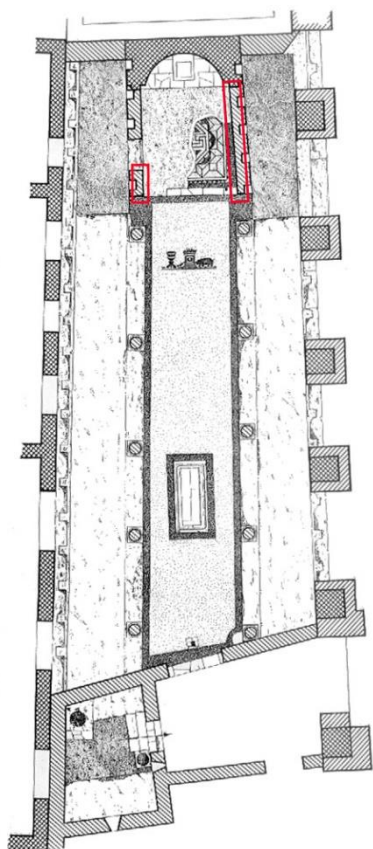


図 14(左) Sacello delle Tre Navate 平面図 (Becatti(1954), fig. 15 から転載(図 13・14 部分を赤枠で改変))
 図 15(右上) 内陣右壁、図 16(右下) 内陣左壁

(2) Cassegiato degli Aurighi(III, X, 1)

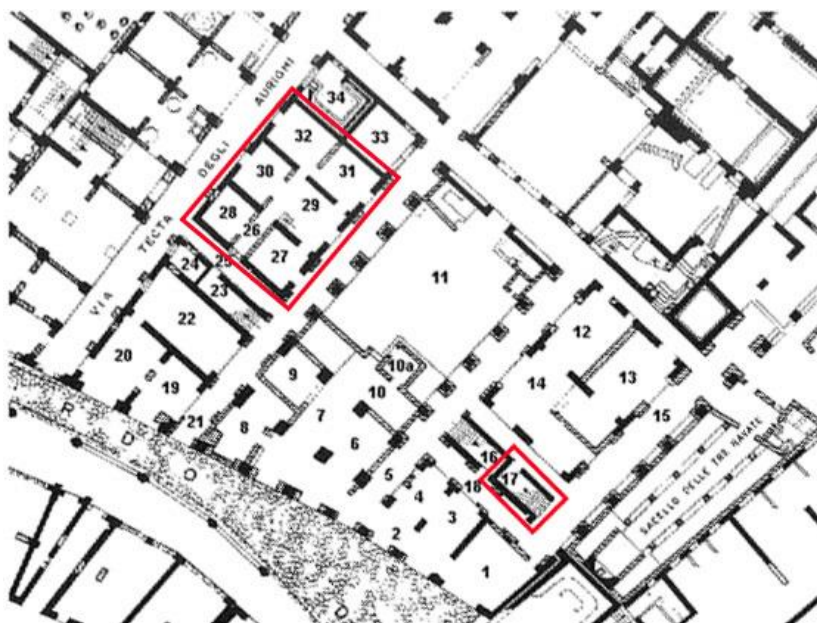


図 17 Cassegiato degli Aurighi 平面図 (Calza(1954)より転載(一部改変))

・ Room 17

この部屋(図 17)は、階段下の 4 畳に満たない小部屋(180×380(曲部最大)×245(最大)cm)であるが、40 点ものグラフィッティを有している(図 18)。

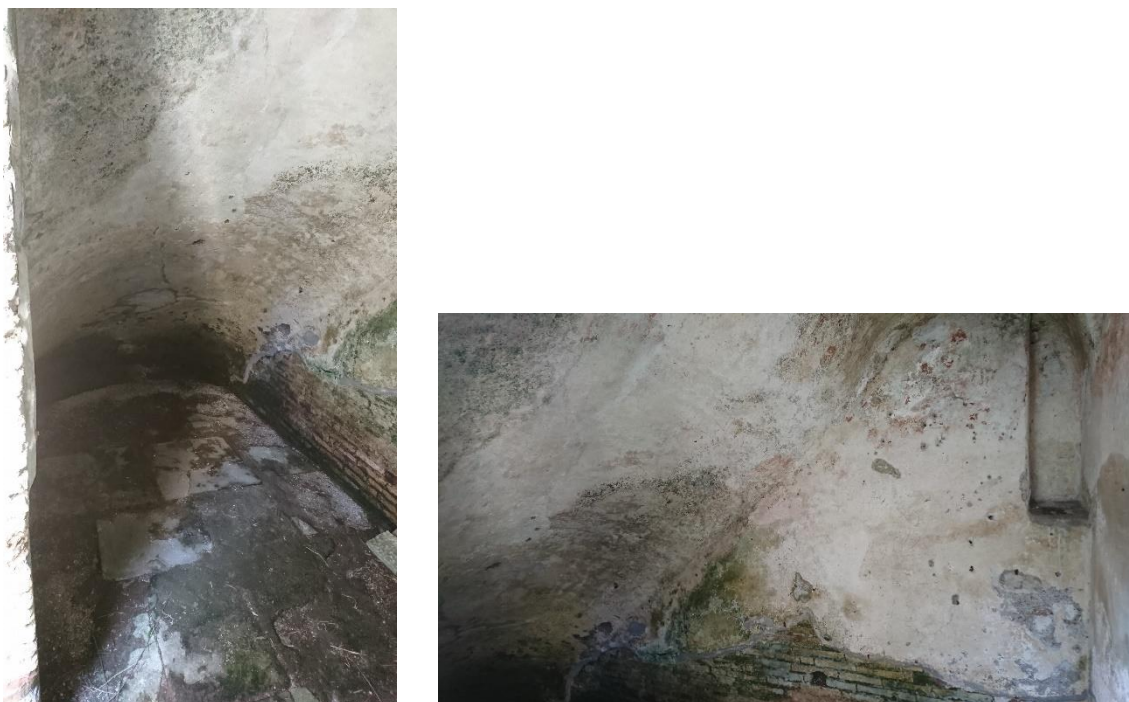


図 18 Room17(左：入り口から左方向、右：入り口正面)

これはオスティア最大のグラフィッティ点数(93 点)を誇るこの遺構の半数近くに達し、オスティア全体でも有数である。内容もすべて文字グラフィッティで、しかもその多数を占める「数字」(68 点)、「日付」(39 点)、「名前」(24 点)以外の長く、雑多なものが多い(「人物関係(People—About people)」7 点(G0268, G0274, G0287, G0288, G0294, G0302, G0305)、「性的関係」5 点(G0280, G0284, G0286, G0293, G0299)、「名前」4 点、「日付」3 点、「アルファベット」2 点(G0276, G0277)、「競技関係(Amphitheatre and circus)」1 点(G0270)、「奴隷関係(Master and slaves)」1 点(G0282)²⁸、「医療関係(Medicine)」1 点(G0279)、「不明なテキスト」16 点)。このグラフィッティにまみれた特異な部屋は、果たして何に使用されたのであろうか。この点はグラフィッティのコンテクストにとって重要であるし、当時のオスティアを想像することにもなる。というのも、そもそもこの部屋は特異なものではなく、他の部屋のグラフィッティは当時の改修・改築や伝来過程で失われただけで、同様な光景がそこら中に広がっていたかもしれない。

ここで興味深いのは、G0296²⁹の存在である。残念ながら再確認できていないものの、これは執政官マルクス・ガウィウス・スキッラ・ガッリカヌスとセクストゥス・カルミニウス・ウェトゥスの名を記したもので、150 年に相当する。この遺構は、アントニヌス・ピウス治世初期(140 年ごろ)に建造が終えられたとされるので³⁰、G0296 は消されもせず、長い間残り続けたことになる。この遺構やこの部屋がいくつまで機能し続けたのかは不明であるが、少なくとも一、二百年に亘るだろう。風雨にさらされないとはいえ数百年間何のメンテナンスも受けなかったとは考えにくい、多くのグラフィッティの存在はあまり手を入れられなかったが故ともとれる。となれば、あまり活気のなく、気にされない、しかし少なくない人数が出入りする狭い場所、例えば物置のようなものであったか。

では、この場所に入出し、多くのグラフィッティをなしたのはどのような人々であろうか。ここを物置とす

る場合、その一番の利用者は、この遺構の住人、そしてとくに彼らの奴隷に違いない。まさに G0282 は奴隷の手によるものと考えられる³¹。さらには、内容から推測すると、リテラシー能力に富んだ人々がいたことは疑いない。挨拶(G0287, G0299)³²や恋のさや当て(G0293)³³など思い思いに表現し、G0268・G0305³⁴において定型句的ではあるが自らの行いを冗談めかすことまでしてのけている。ギリシア語グラフィッティも多く(遺構全体で 13 点中 12 点)³⁵、奴隷であったとまでは言えないが、東方出身者や彼らに連なる人々も含まれる。内容「不明なテキスト」が半数近くを占めるのが悔やまれるが、すでに述べた通り、それは我々が理解できていないだけ、多分に個々のグラフィットに分離できていないだけでもあろう。ただ、この内容「不明なテキスト」のうちギリシア語グラフィッティについて、Solin は、理解できないのは我々ではなく、書き手に原因のある可能性を指摘している³⁶。つまり、個々の文字こそ判読できても内容の理解できないグラフィッティの多さがオスティア(やローマ)のギリシア語グラフィッティの特徴であり、それは書き手のリテラシー能力の低さ(それは書き手自身の問題のほか、グラフィッティの大部分が西方においてギリシア語の知識が乏しくなってくる 2 世紀後半から 3 世紀という時代性のため)や、そもそもこれらの書き手(非ギリシア人、非東方出自)がギリシア語を解さず、何らかを参考にギリシア語で表現しようとして失敗したためであると。実際、この部屋でギリシアアルファベットを練習した人もおり、リテラシー能力の低い人々の存在も疑いない。

・ Room 26～32

Room 26～32(図 17)は、Casseggiato degli Aurighi の北西区画に属す諸部屋である。相互につながっているが、同区画の Room 33、34(公共トイレ)とは隔たれている。

グラフィッティが集中するのは Room 28(14 点)、30(16 点)、32(7 点)の 3 部屋で、Room 29 からの 2 点(G0307, G0308)、おそらくは 3 部屋のどこかの 4 点(G0252, G0255, G0256, G0257)も併せると 43 点に達する。この一群で特徴的なことは、商業的な内容のものが極めて多いことである。直接的に「商業テキスト(Commercial texts)」と分類されているものは商品価格・支払いに関わる 4 点(G0258, G0264 など、オスティア全体での総計は 8 点)³⁷であるが、奴隷購入(G0259)³⁸、ヘルメスへの献辞(G0260, G0261)³⁹は商業色が強く、さらには as 記号のある G0311(「数字」に分類)⁴⁰、そして「動物関係(Animals)」に分類されている G0257(羊の誕生か? (About the birth of sheep?))⁴¹も商業関係かもしれない。これらの部屋は G0308⁴²に基づいて、しばらくの間ホテルであったとされているが、むしろグラフィッティからはこの区画が商業的な機能を持っていたことを示唆している。その機能のゆえに様々な人々が往来したにちがいないが、グラフィッティの書き手は、内容から、多くは商品の売り手であっただろう。

ここで興味深いのは、Casa a Giardino との比較である。Giardino では、多くのグラフィッティの残存している中央部(図 19 の⑬～⑳)が、店舗や工房であったとされてきた。それは多くの「数字」(74 点中?も併せて 39 点)⁴³によるが、具体的な情報によってより確実に商業的な Room 26～32 ではほとんど「数字」はないのである(5 点)。しかも、Giardino の文字グラフィッティは非常に簡素で、内容を理解できるのも 10 点中 1 点(奥山(2018)、⑬-7-②)に限られる。図像グラフィッティも多く(74 点中 25 点)、明らかな対照をなす⁴⁴。14 点の Room 26～32 はともかく、Room 17 に至っては 1 点もない。このような Giardino の状況は、文字を書けないリテラシー能力の低い人々の「手」のためであろうか。Casseggiato degli Aurighi のグラフィッティ調査を経た今、それは大いにあり得る。それともあえて意図的になされたためであろうか。例えば、図像グラフィッティは一種の室内装飾として機能することがあったようである⁴⁵。実際中央部分は、店舗や工房でなければ、住居であった可能性が高く、そしてそれはグラフィッティのなされたと思われる時代(2 世紀後半～3 世紀以降)のオスティア全体の動向、すなわち商業よりも住居的な機能の比重が高まっていたことに沿うものである⁴⁶。グラフィッティの書き手は家主、その家族や奴隷、客人になろう。ただ、この遺構全体の構造は、広い空間によって中央部分が島のように配

置され、空間には6つの大きな水盆という、特異なものである。広い空間と水盆を併せて考えると、ここには動物が収容されていたかもしれない。となれば、中央部分は、一般的な住居というよりもゲストハウスのようなもの、あるいは海岸に近いこともあって、港湾労働者に関わりのある施設であったか。

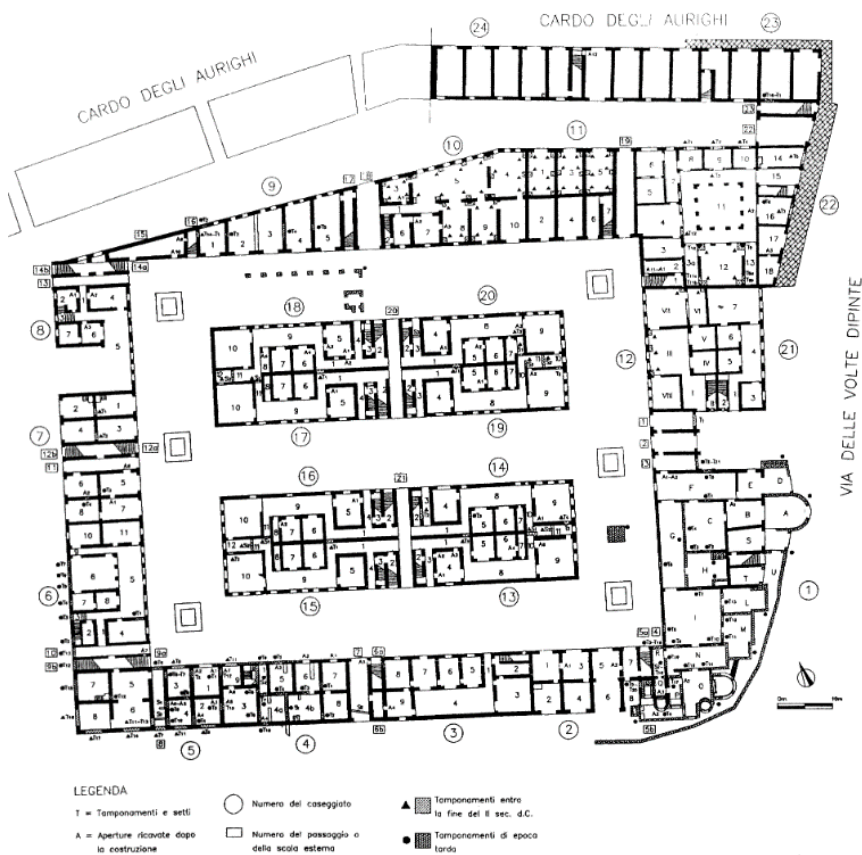


図 19 Casa a Giardino 全体図 (Cervi(1998), fig. 2 から転載)



図 20 Casa a Giardino
(写真左：中央部、正面：空間と水盆)



図 21 水盆

おわりに

本稿では、2018 年度夏季にオスティアにおいて行ったグラフィッティ調査の成果を提示してきた。それはまず 6 の遺構(3 遺構は昨年度の再調査)で行った確認調査によって、既知グラフィッティの再確認のみならず、いくつかの知見(所属不明グラフィッティの遺構同定や従来の判読の修正)を得ることができたこと、そして、確認調査に際して 3 つの遺構から発見した新出グラフィッティ 17 点(文字グラフィッティ 10 点、図像グラフィッティ

イ 7 点)の刊行である。さらには調査遺構のうち Sacello delle Tre Navate(III, II, 12)と Casseggiato degli Aurighi(III, X, 1)については調査によって得られた知見から遺構の性格やグラフィッティの書き手の問題に、その考察からは昨年度調査した Casa a Giardino の機能や書き手にも踏み込んだ。その際、前二者のギリシア語グラフィッティの多さがキーポイントの一つであったが、この特徴は、それらが位置する Regio III の特徴でもある。Regio 全体に目を向けるためにも、同 Regio でギリシア語グラフィッティを含む一定のグラフィッティ数を有する Casa delle Volte Dipinte (III,V,1)、Casa delle Ierodule (III,IX,6)(再調査)、Casa delle Pareti Gialle (III,IX,12)の調査が不可欠であり、来年度以降の課題である。無論、考古学、建築学、地理学、そして壁画やグラフィッティモチーフの観点から美術史などとの連携も忘れてはならないが、まずはグラフィッティ情報の蓄積とそれに基づく考察を提示していきたい。

参考・引用文献

- ・ Becatti(1954) : Becatti, G., *Sacavi di Ostia II. I mitrei*, Roma, 1954.
- ・ Calza(1954) : Calza, G., Becatti, G., Gismondi, I., DE ANGELLIS D' OSSAT, G., BLOCH, H., *Scavi di Ostia I. Topografia Generale*, Roma, 1954.
- ・ Cervi(1998) : Cervi R., “Evoluzione architettonica delle cosiddette ‘case a giardino’ ad Ostia”, *Citta e monumenti nell'Italia antica. Atlante tematico di topografia antico* 7, Roma, 1998, pp. 141-156.
- ・ Clarke(1991) : Clarke, J. R., “The decor of the House of Jupiter and Ganymede at Ostia Antica. Private residence turned gay hotel ?,” *Roman art in the private sphere*, Ann Arbor, 1991, pp. 89-104.
- ・ De Laine(1995) : De Laine, J., “The Insula of the Paintings at Ostia 1.4.2-4. Paradigm for a city in flux”, in Cornell, T. J., Lomas, K. (eds.), *Urban Life in Roman Italy*, London, 1995, pp. 79-106.
- ・ Della Corte(1961) : Della Corte, M., Ciprotti, P., “Inscriptiones parietales Ostienses”, *Studia et documenta historiae et iuris* 27, pp. 324-341.
- ・ Gering(2002) : Gering. A., “Die Case a Giardino als unerfüllter Architektentraum. Planung und gewandelte Nutzung einer Luxuswohnanlage im antiken Ostia”, *Römische Mitteilungen* 109, 2002, pp. 109-140.
- ・ Langner(2001) : Langner, M., *Antike Graffitizeichnungen : Motive, Gestaltung und Bedeutung*, Dr. Ludwig Reichert Verlag Wiesbaden, 2001.
- ・ Meiggs(1973) : Meiggs, R., *Roman Ostia*, Oxford, 1973(2nd ed.).
- ・ Solin(1971) : Solin, H., “I graffiti parietali di Roma e di Ostia,” in Acta of the Fifth Epigraphic Congress 1967, 1971, pp. 201-208.
- ・ Solin(1972) : Solin, H., “Griechische Graffiti aus Ostia”, *Arctos* 7, pp. 190-199.
- ・ Solin(2008) : Solin, H., “Introduzione allo studio dei graffiti parietali. II. Ostia”, *Unexpected voices. The graffiti in the cryptoporticus of the Horti Sallustiana (O. Brandt ed.)*, Stockholm, pp. 116-124.
- ・ Stevens(2005) : Stevens. S., “Reconstructing the Garden Houses at Ostia. Exploring Water Supply and Building Height”, *BABesch* 80, 2005, pp. 113-123.
- ・ 奥山(2017) : 拙稿、「オスティア・アンティカ『七賢人の部屋』文字史料研究」、坂口・豊田(2017)、193-242 頁。
- ・ 奥山(2018) : 拙稿、「史料紹介 オスティア・グラフィッティ」、『西洋史学報』44、111-126 頁、2018 年。
- ・ 奥山(2019) : 拙稿、「2017 年度オスティア・アンティカ遺跡グラフィッティ調査報告」、『西洋史学報』45、2019 年(刊行予定)。
- ・ 坂口・豊田(2017) : 坂口明・豊田浩志編、『古代ローマの港町：オスティア・アンティカ研究の最前線』、勉

誠出版、2017 年。

・豊田(2017)：豊田浩志、「『七賢人の部屋』のフレスコ画をめぐって トイレ、食堂、居酒屋、それとも脱衣所?」、坂口・豊田(2017)、133-192 頁。

・ペツレグリーノ(2017)：アンジェロ・ペツレグリーノ、「オスティア 歴史的 - 考古学的プロフィール」、坂口・豊田(2017)、3-13 頁。

¹ 日本隊によるオスティア・アンティカ調査は、これまでに①科学研究費補助金 基盤研究(B)「古代ローマ都市オスティア・アンティカの総合的研究」(代表：坂口明(日本大学教授)、2008 年度～2010 年度)、②科学研究費補助金 基盤研究(B)「古代イタリア半島港湾都市の地政学的研究」(代表：豊田浩志(上智大学教授)、2010 年度～2012 年度)、③科学研究費補助金 基盤研究(B)「リバースエンジニアリングとしての建築史学、古代ローマ遺跡のソースコードを読み解く」(代表：堀賀貴(九州大学教授)、2013 年度～2015 年度)があり、その成果は、坂口・豊田(2017)として刊行している。

² 本科研では、目的達成のために、主に 5 つのアプローチ(①従来の文献学的アプローチ、②遺構・遺物への 3D レーザー測量によるデータ収集と、それを生かした建築学的アプローチ、③衛星画像を用いて地下埋蔵遺跡の発見を目指す地理学的アプローチ、④発掘出土資料を用いた考古学的アプローチ、そして、⑤各種文字情報(碑文、モザイク、貨幣銘、グラフィッティなど)を用いたアプローチ)を試みている。②～⑤については現地・現物の実見、考察が必要不可欠であり、現地調査を行う所以となっている。2017 年度調査については、オスティア・アンティカ遺跡管理事務所に提出したレポート(<http://www.koji007.tokyo/wp-content/uploads/2018/07/report-ostia-antica-in-2017-2018.pdf>)、グラフィッティについては奥山(2019)も参照。また、成果の一端は、日本西洋史学会第 68 回大会小シンポジウム「『見えざる人々の探し方』—庶民史構築のために」(於 広島大学、2017 年 5 月 20 日)でも提示している(筆者は、「グラフィッティから見るオスティア—現地調査成果を中心に—」として報告した)。なお、主に②については、今年度から科学研究費補助金 基盤研究(A)「ポンペイとオスティア：古代ローマにみる建築術の総体としての都市と技術の大衆化」(代表：堀賀貴(九州大学教授)、2018 年度～2021 年度)も新たに採択されている。

³ 現地調査にあたって、オスティア・アンティカ考古遺跡管理事務所の Dott.ssa Mariarosaria Barbera 所長(当時)、そして Dott. Marco Sangiorgio 技術部長から、調査への全面的支援とご指導を、さらには撮影写真使用の許可もいただいた。また、豊田浩志調査隊長をはじめとする 2018 年度オスティア・アンティカ調査隊メンバー(特に小川拓郎、ゲイル・エドワード、坂口明 敬称略 50 音順)から多大なご配慮、ご協力を頂いた。記して感謝申し上げます。

⁴ 現地調査に先立つことができる限りのオスティア・グラフィッティの把握については奥山(2018)を参照。

⁵ これは「The Ancient Ostia Graffiti Project」グループが管理するオスティアに関する総合データベースであり、個々の建造物プラン、文献目録、文献史料のみならず、碑文、グラフィッティなどを網羅している。グラフィッティは、大まかな内容と建造物単位で場所として分類され、可能な限りの文字翻刻がなされている。スケッチや写真が添えられることもあり、写真には、元の写真と線刻をなぞって強調したものが並置されている。

⁶ G0023、G0024、G0025、G0026、G0027、G0028、G0029、G0030、G0031、G0032、G0033a、G0033b、G0034、G0035、G0036a、G0036b、G0036c(=G0036k)、G0036d、G0036e、G0036f、G0036g、G0036h、G0036i、G0036j、G0036l。赤文字は確認できなかったものである。以下同じ。

⁷ G0056、G0057、G0058、G0059。

⁸ G0152、G0153、G0154、G0155、G0156、G0394、G0494、G0515、G0516、G0517、G0518、G0519。

⁹ Solin(2008), p. 121. 2015 年については、データベースの G0152 の欄を参照。

¹⁰ G0176、G0177、G0178、G0179、G0180、G0181、G0182、G0183、G0184、G0185、G0186、G0187、G0188、G0189、G0190、G0191、G0192、G0193、G0194、G0195、G0196、G0197、G0198。

¹¹ データベースによると 95 点であるが(奥山(2018))、調査の結果、G0461 は G0298 と同一であり、G0388 は上の写真は G0275、下の写真は G0295・G0297 あたりのものであるため本稿では除外した。

¹² G0268、G0269、G0270、G0271、G0272、G0273、G0274、G0275、G0276、G0277、G0278、G0279、G0280、G0281、G0282、G0283、G0284、G0285、G0286、G0287、G0288、G0289、G0290、G0291、G0292、G0293、G0294、G0295、G0296、G0296、G0297、G0298、G0299、G0300、G0301、G0302、G0303、G0304、G0305、G0306、G0307。

¹³ G0249、G0250、G0251、G0252、G0253、G0254、G0255、G0256、G0257、G0258、G0259、G0260、G0314、G0317、G0453、G0454、G0458、G0464

¹⁴ G0327、G032。

¹⁵ G0261、G0262、G0263、G0264、G0265、G0266、G0267、G0315、G0316、G0318、G0319、G0320、G0321、G0322、G0322、G0326。

¹⁶ G0308、G0309、G0310、G0311、G0312、G0324、G0325。

¹⁷ G0313(next to one of the paintings of charioteers in the ambulatory) ; G0455、G0456、G0457、G0459、G0460、G0462、G0463、G0465、G0514(Unknown)。

¹⁸ 個々のグラフィッティとその配置写真については、紙幅の都合上とカラーで提示したいために本稿では掲載せず、以下の HP 上で公開する(<https://ostiajapan.web.fc2.com/>)。

¹⁹ G0030、0033a、0033b、0034、0035、G0036h。

²⁰ ファルス図像については、Langner(2001), p. 32 を参照のこと。

²¹ 本稿 15-16 頁を参照。

²² 「七賢人の部屋」については、奥山(2017)、豊田(2017)が詳しい。

²³ Langner(2001), pp. 67-70.

²⁴ G0152?, G0153, G0154, G0155, G0515?, G0518, G0519

²⁵ この状況はデータベースでは左壁の窓の左とのみ記述され、画像で提示されている 2015 年時の調査記録では把握されているが(G0152 の項)、それ以上の言及はない。

²⁶ Regio III : 29 点(Sacello delle Tre Navate(III, II, 12) : 6 点(G0152、G0153、G0154、G0155、G0156、G0519) ; Casa delle Volte Dipinte(III, V, 1) : 3 点(G0164、G0167、G0168) ; Casa delle Ierodule (III, IX, 6) : 3 点(G0600(=Falzone(2014), №47)、G0612(=Falzone(2014), №59)、G0614(=Falzone(2014), №61)) ; Casa delle Pareti Gialle (III, IX, 12) : 3 点(G0211、G0215、G0221) ; Casseggiato degli Aurighi(III, X, 1) : 13 点(G0260、G0268、G0269、G0271、G0273、G0276、G0277、G0289、G0290、G0292、G0297、G0305、G0307) ; Casseggiato di Annio(III, XIV, 4) : 1 点(G0334))。

Regio III 以外 : 9 点(Domus di Giove e Ganimede (I, IV, 2) : 1 点(G0023) ; Quattro Tempietti (II, VIII, 2) : 3 点(G0138、G0140、G0141) ; Casseggiato del Temistocle (V, XI, 2) : 1 点(G0520) ; Unknown : 4 点(G0373、G0375、G0377、G0508))。

ちなみに奥山(2018)ではギリシア語グラフィッティを 31 点としているが、現地調査を経て 38 点へと増加している。

²⁷ この点について、Becatti は、船図像(G0394、G0494)と関連づけて、Sacello delle Tre Navate がギリシア人船乗り(navicellai)や船主(armatori)の集会所であり、デュオニュソス崇拝が行われていたことを示唆し

(Becatti(1954), pp. 95-97)、Solin もデュオニュソス崇拜の場であった可能性は認めている(Solin(2008), p. 121)。

²⁸ 註 31 を参照。

²⁹ M CAVIO SQUILLA GALLICANO | SEX CARMINIO VETERE [co(n)s(ulibus)].

³⁰ Calza(1954), p. 147.

³¹ EX PERSECVNDE DOMINII SALVTIS EME. このグラフィットは、「Lord give safety from the persecutor(?)」と解釈されることで「Religion – Christianity」に分類されている。ところが PERSECVNDE は迫害者のみならず、追跡者(あるいは追跡)とも解釈することができる。この場合、「ご主人様の追跡者(追跡)から私を救ってください」と訳せよう。それ故に、本稿では、このグラフィットを「奴隷関係(Master and slaves)」に分類している。

³² G0287: OBIILIA SVO | [---]OLATIO VA(1e)「オベリアが彼女の・・・にごきげんよう」; G0299: PVPA V(ale) SAL(utem)「こんにちは、わたしのかわい子ちゃん、ごきげんよう」。

³³ CRVSEOS AMAS ADAMA | APELLA CRVSEOS . IVSTVS IANVAR[---]VS | PLVRIMA「クリュシスよ、君はクリュセロスを愛しているが、しかし彼はアペッラを愛している。イウストゥス・イアヌアリウスからごきげんよう」。

³⁴ G0268 : Παντες παντα | επεγραψαν | αιγω μωνως ουδεν αιγραψα「どいつもこいつも落書きをしたが、書かなかったのは私だけである」; G0305 : Παντες δια|γραφουσι, εγω μολνος ουδεν εγραψα. | Πυγιζο παντας τους | επιτοιχογραφους「どいつも落書きをしたが、書かなかったのは私だけである。私はすべての落書き人とアナルセックスをする」。

³⁵ 註 26 を参照(G0260 を除く)。

³⁶ Solin(1972), pp. 191-192.

³⁷ G0258 : PANIIM A(sses) VIII | LIGNAA(sses) V「パン 8 アス、木材 5 アス」; G0264 : (denarii) III | A(sses) VIII | A(sses) VIII「3 デナリウス、8 アス、8 アス」。

³⁸ HICEGOMENAEMI「ここで私は(奴隷である)メナスを買った」。

³⁹ G260 : Ερμη δικαie, κερδος Εκτικω [δι]δου「正義のヘルメス(メルクリウス)様、ヘクティコスに利益をもたらしてください」; G0261 : MERCVR(io) V(otum) L(ibens) S(olvit or olverunt) P CO | AES SOLVVIMVS「メルクリウスに誓いを進んで果たした・・・」。

⁴⁰ IOCINA | (denarii) C C C C C | X X V.

⁴¹ MII□I VIS . OVIIS NATI.

⁴² VIII IDVS SIPTIIMBRIIS | LICINIVS HOSPIIS VIGVIT「9月6日に主人であるリキニウスが・・・」。

⁴³ 奥山(2018)。

⁴⁴ Casa a Giardino のグラフィッティについては、データベースに加えて奥山(2018)も参照。

⁴⁵ Langner(2001), p. 140.

⁴⁶ ペツレグリーノ(2017)、8-12 頁。